

# 巖谷小波・幸田露伴の白ゴマ点

岡 崎 晃 一

A study of “Shirogomaten” in Iwaya Sazanami’s works and Kooda Rohans’s works.

Kooichi OKAZAKI

## 要 旨

西洋の句読法（パンクチュエーション）のセミコロン（；）に当たる区切り符号として、白ゴマ点（●）が明治期の諸作家で試用されたが、巖谷小波と幸田露伴とが用いた白ゴマ点は大休止符に相当するものである。

キーワード：句読法，区切り符号，白ゴマ点，半終止法，中止法，大休止符，小休止符

## 1 はじめに

明治期の作家にとって、句読法は文末表現とともに悩みの種であった。本稿では、巖谷小波と幸田露伴とが用いた白ゴマ点の特徴を探ることとする。

なお、印刷の都合上、本文・引用文共に、読点の代わりにコンマが用いられている。

## 2 巖谷小波の白ゴマ点

### 2-1 「妹背貝」(巖谷小波)のテキスト間の異同

「妹背貝」を所収するテキストで白ゴマ点の用いられているものに次の4種がある(個数は白ゴマ点)。

- A『新著百種 第4号』(吉岡書籍店, 1889<明22>) 208個
- B『現代日本小説大系5』(河出書房, 1956<昭31>) 203個
- C『現代日本文学全集84』(筑摩書房, 1957<昭32>) 206個
- D『新日本古典文学大系明治編21』(岩波書店, 2005<平7>) 209個

4種のテキスト間で白ゴマ点の用例数に僅かながら差異が認められ、4種のテキスト間の白ゴマ点(白点)の異同をまとめると次の表のようになる。

	a	b	c	d	e	f
A 208	白点	白点	白点	白点	句点	読点
B 203	白点	白点	読点	無符号	読点	読点
C 206	白点	読点	白点	白点	白点	読点
D 209	白点	白点	白点	白点	句点	白点
用例数	200	3	4	1	1	1

「a 4種のテキスト全てが白ゴマ点」は200例で、「b Cだけが読点で他の3種が白ゴマ点」が3例、「c Bだけが読点で他の3種が白ゴマ点」が4例ある。「d Bだけが無符号(他は白ゴマ点)」, 「e Cだけが白ゴマ点(他は句点か読点)」, 「f Dだけが白ゴマ点(他は読点)」が各1例ずつある。

初出Aと校訂に意を注いだDとを比較し、Aの読点(B・Cも読点)がDで白ゴマ点になっているのは次の例文アにおける下線②の箇所である(旧字体は新字体に改め、ルビは省く)。

ア 件の少女は、急ぎ足で芝原の処まで来たが、①やがてふりかへつて、②  
可愛らしい声をはりあげ、／「水無雄さん、はやく入らつしやいヨー。ア  
ラよく咲いてること蓮華が、③

下線部①と③は4種のテキストでいずれも白ゴマ点であるが、②だけは「A・B・Cで読点、Dだけが白ゴマ点」になっている。なお、③の後の会話文を閉

じるカギカッコは、文中の他の箇所と同様、用いられていない。

## 2-2 「妹背貝」の白ゴマ点（テキスト D）

「妹背貝」は「読者心得」の後、「春・夏・秋・冬」の4章から成っているが、テキスト D（猪狩友一・校注）における章ごとの白ゴマ点は「読者心得 6，春 85，夏 31，秋 45，冬 42，合計 209」で、ほぼ各ページに用いられている。次に「読者心得」と「春」の章から引用する。

### 2-2-1 「読者心得」の白ゴマ点

目次の前に6条から成る「読者心得」が置かれており、次のように6箇所に白ゴマ点（下線部）が用いられている。

イ 第三条 文体は例の言文一致、①少し何かがかぶれた所あれども、此作者ならでは斯ふは書けず。有り難く拝読すべき事。

第四条 此の小説は、句読無くして読めるものに非ず、②乃ち、③。三通りの句点を設けたり。一生懸命之に便るべき事。

第六条 初紅葉、④アア夢！、今又妹背貝の春の巻、⑤いつも小供ばかり、チト鼻に付く様なれど、⑥此は作者が小供だからと、大眼に見て置く可き事。

第四条に区切り符号として「読点・白ゴマ点・句点」を使用する旨が明記されており、その用例③を除く5箇所の白ゴマ点の上接語は次のようになる。

○半終止法 4箇所…名詞3（①，④，⑤） 助動詞終止形1（②）

○中止法 1箇所…接続助詞1（⑥）

これら5箇所の白ゴマ点は読点と句点の間の区切り符号として用いられたという意図が読み取れる。特に第六条は「白ゴマ点，読点，白ゴマ点，読点，白ゴマ点，読点，句点」というように、白ゴマ点と読点が交互に現われ、均衡が取られている。なお、感嘆符の後に読点が付いているのは現代表記と異なり、試行期の特徴を物語っている。また、第五条にはく此の小説には、—— …… 多く、\*\*\*\*（ ）も用ひて、大いに妙味を助けたる処なり。>と記され、それぞれ「ダッシ、リーダー、スター、クワッコ」というルビが施されている。

明治20年頃、句点だけを使用する作家や句読点を一切使わない作家への対抗意識と新しい試みへの意欲が強く感じられる。

## 2-2-2 「春」の章の白ゴマ点

次の例文ウは主人公の少年少女、石山水無雄と糸辺艶子が登場する場面である（算用数字は文番号を示し、丸数字は白ゴマ点を示す）。

ウ 1 春は四月の下旬、旧暦ならば弥生と云ふて、一年中での長閑な月。2 漸く眼をさましかけた若草の、青地を彩る蒲公英の黄色、蓮華の花、其の紅を奪ふ堇の紫。3 大和ぶりに形容すれば、さながらの錦の茵、雨に打たすのも惜い様な芝原の眺め。4 そればかりか此処の花壇には香自慢の薔薇の花、①向ふの岩蔭には色を競ふ杜鵑花。5 此等に心引かされてか、まだ散りもせぬ遅咲きの八重桜、②はては花を持たぬ柳までが、嬉れしさうに笑を含んで、風に戯れてゐる塩梅、③見るから心うつとりとして、世も我も忘れる長閑さ。

=水無雄さん、早く来ないとみんな取てしまつてヨ。=

6 梢を離れた初音の一声、④ほどなく顕れたは十か十一にならうと思はれる少女。7 黒く軟かさうな髪を組みもせず後へさげ、⑤顔立ちは寧ろ円顔で、色は白く、頬から眼の縁へかけて薄桃色をばかし、⑥眼の黒目勝にパツチリとした工合、活発な性質も想像される。8 紅くてしまりのよい唇、物を云ふ時真白な行儀のよい歯が、二三枚垣間見る処、その可愛らしさ、実に何とも云えない。9 衣服は銘仙の綿入に、赤と白と紫と、染分けにした鹿子の帯をしめ、⑦上には黄八丈の道行に、萌黄の綴紐の着いて居るのを着て、⑧海老色の鼻緒の着いた駒下駄を穿いて居た。

例文ウ第5文の後の「=」は会話文を示す符号であるが、ウに用いられている8箇所の白ゴマ点の上接語を用法別・品詞別に示すと次のようになる。

○半終止法 4箇所…名詞4（①，②，③，④）

○中止法 4箇所…動詞連用形3（⑤，⑥，⑦），接続助詞1（⑧）

中止法の白ゴマ点（⑤～⑧）が用いられている第7文、第9文における区切り符号を使用順に示すと次のようになる。

・第7文 白ゴマ点 (⑤), 読点, 読点, 白ゴマ点 (⑥), 読点, 句点

・第9文 読点, 読点, 白ゴマ点 (⑦), 読点, 白ゴマ点 (⑧), 句点

第7文の場合, 「髪型, 顔立ち, 眼」の3要素を描写しており, その内「顔立ち」は「円顔」「色白」「頬の薄桃色」を一まとめにし, 「顔立ち」の前後の白ゴマ点⑤・⑥が「大きな区切り」になっている。

同様に, 第9文の場合, 「帯をしめ⑦」と「着て⑧」は, 他の「綿入に, 赤と白と紫と, 道行に」と比べて, 「大きな区切り」を示していると言える。

テキストDの校注者・猪狩友一氏が「補注」で<欧文の句読法との対応では, 「、」はコンマ (,), 「、」はセミコロン (;), 「。」はピリオド (.) にそれぞれ該当するとも言えようが, 『妹背貝』における白ごま点の頻用から見ると, 文脈上の区切りの大小で (すなわち小さな区切りでは「、」を, やや大きめの区切りでは「、」を, といった具合に) 使い分けているようである。>と記していることは, 第7文・第9文の用例に該当する。

### 2-2-3 用法の特徴

「妹背貝」(巖谷小波)での白ゴマ点は区切りの大小において読点との使い分けが見られ, 区切りの間隔に句点との使い分けが認められる。つまり, 読点が「小休止符」で, 白ゴマ点が「大休止符」である。区切り符号の使用基準の定まらない明治20年代の初めにおいて, 「妹背貝」での白ゴマ点の試みは大いに称えられる。仮令, 使用基準に曖昧さが残るとしても, 新しさへの挑戦を評価したい。

## 3 幸田露伴の白ゴマ点

### 3-1 「風流仏」(幸田露伴)のテキスト

「風流仏」のテキストで, 白ゴマ点が使用されているのは次の2種である。

A 『新著百種第5号 風流仏』(吉岡書籍店, 1889<明22>)

B 『新日本古典文学大系明治編22幸田露伴集』(岩波書店, 2002<平14>)

なお, 次の7種のテキストに収められた「風流仏」には白ゴマ点は使用されていない。

- ・『露伴全集 第1巻』(岩波書店, 1952<昭27>)
- ・『現代日本文学全集3 幸田露伴集』(筑摩書房, 1954<昭29>)
- ・『愛蔵版現代日本文学全集7 幸田露伴集』(筑摩書房, 1961<昭36>)
- ・『日本現代文学全集6 幸田露伴集』(講談社, 1963<昭38>)
- ・『明治文学全集25 幸田露伴集』(筑摩書房, 1968<昭43>)
- ・『現代日本文学大系4 幸田露伴集』(筑摩書房, 1971<昭46>)
- ・『日本近代文学大系6 幸田露伴集』(角川書店, 1974<昭49>)

### 3-2 「風流仏」の白ゴマ点

テキスト A と B には次の表のように497個の白ゴマ点が用いられている。

発 端	第 一	第 二	第 三	第 四	第 五	第 六	第 七	第 八	第 九	第 十	団 円	合 計
22	5	28	65	57	75	56	35	47	12	86	9	497

テキスト A における白ゴマ点(下線部)は次のような使われ方をしている。

#### 3-2-1 「第一 如是相」

「第一 如是相」の第1文(句点まで)は次のように長文である。

ア 名物に甘き物ありて、空腹に須原のとろろ汁殊の外妙なるに飲幾杯か滑り込ませたる身体を此俛寝さするも毒とは思へど為る事なく、道中日記注け終ひて、のつそつしながら煤びたる行燈の横手の楽書を読ば山梨県士族山本勘介大江山退治の際一泊と禿筆の跡、さては英雄殿もひとり旅の退屈に閉口しての御わざくれ、おかしき計りかあはれに覚えて初対面から膝をくづして語る炬燵に相宿の友もなき珠運、微なる埋火に脚を烘り、つくねんとして櫓の上に首投かけ、うつらうつらとなる所へ此方をさして来る足音、しとやかなるは踵に亀裂きらせしさき程の下女にあらず。

例文アには文末の句点を除くと、「読点5, 白ゴマ点4」の区切り符号が用いられており、それらの上接語を用法ごとの品詞別に示すと次のようになる。

○半終止法 1箇所 ・ [白ゴマ点] 名詞1 (跡)

- 中止法 8箇所 ・ [読点] 動詞連用形 2 (烘り, 投かけ) 接続助詞 2  
 (て 2) 名詞 1 (珠運) ・ [白ゴマ点] 名詞 2 (わざくれ, 足音)  
 形容詞連用形 1 (なく)

上接語の品詞別では読点と白ゴマ点の区別は明確でなく、名詞「跡」の後は半終止法だが、残り 8 個は中止法である。一方、区切り符号は「読点, 白ゴマ点, 読点, 白ゴマ点, 白ゴマ点, 読点, 読点, 読点, 白ゴマ点, 句点」の順に用いられており、読点が「小休止符」(小さな区切り)、白ゴマ点が「大休止符」(大きな区切り) という面から見ると、両者の区別は説明可能である。要するに、読点は「小休止符」に用い、白ゴマ点は「大休止符」に用いているのである。

### 3-2-2 「第六 如是縁 下」

次は「第六 如是縁 下」の第 1 文である。

イ 世の中に病てふ者なかりせば男心のやさしかるまじ、髭先のはねあがりたる当世才子、高慢の鼻を、つまみ眼鏡ゆゆしく父母干涉の弊害を説まくりて御異見の口に封蝨付玉ひしを一日粗造のブランディに腸加答児起して閉口頓首の折柄、昔風の思ひ付、気に入らぬか知らぬが片栗湯こしらへた、食て見る気はないかと厚き介抱有り難く、へこたれたる腹にお母の愛情を呑で知り是より三十銭の安西洋料理食ふ時もケーキ丈はポケットに入れて土産となす様になる者ぞゆめゆめ微妙なる天の配剤に不足云ふべからずと或人仰せられしは尤なりけり。

例文イの区切り符号(文末の句点を除く)は「白ゴマ点, 読点, 読点, 白ゴマ点, 読点, 白ゴマ点, 白ゴマ点」の順になっており、上接語を用法ごとの品詞別に示すと次のようになる。

- 半終止法 2箇所 ・ [白ゴマ点] 助動詞終止形 2 (まじ, た)  
 ○中止法 5箇所 ・ [読点] 名詞 2 (才子, 思ひ付) 格助詞 1 (を)  
 ・ [白ゴマ点] 形容詞連用形 1 (有り難く) 名詞 1 (折柄)

問題は中止法の 5 箇所、特に名詞は読点と白ゴマ点に分かれている。例文イもアと同様、上接語の品詞別では読点と白ゴマ点の用法の違いは明確ではな

く、「読点が小さな区切り，白ゴマ点が大きな区切り」という意識が作者にあったと考えられる。それにしても，一般的な句読法と比べると読点の使用が少ないようで，例えば，三番目の白ゴマ点の後は「へこたれたる腹にお母の愛情を吞で知り、是より三十銭の安西洋料理食ふ時も、ケーク丈はポケットに入れて、土産となす様になる者ぞゆめゆめ微妙なる天の配剤に不足云ふべからずと、或人仰せられしは尤なりけり。」と，最低4箇所（下線部）の読点を施すのが自然であろう。

### 3-2-3 テキスト間の比較

「風流伝」を所収するテキストでB（『新日本古典文学大系明治編22』）にはA（『新著百種 第5号』）と同じ497個の白ゴマ点を使用されているが，他の7種のテキストには白ゴマ点は使用されていない。例文ア，イの白ゴマ点と比べると，白ゴマ点を用いない7種のテキストでは例文アの「禿筆の跡」（名詞）と例文イの「やさしかるまじ」（助動詞終止形）の後とが揃って句点になっている他はすべて読点になっている。

## 4 おわりに

本稿で調査の対象にしたのは特定の作品であるが，両作家の白ゴマ点の用法をまとめると次のようになる。

- (1) 巖谷小波（「妹背貝」）と幸田露伴（「風流伝」）は，読点を「小休止符」に，白ゴマ点を「大休止符」にと，区切りの大小で読点と白ゴマ点とを使い分けている。
- (2) テキスト間に白ゴマ点の使用数に異同が見られるのは，テキスト編集者の白ゴマ点に関する意識の差の表われであるとともに，白ゴマ点の紛れ易さの証しでもある。

なお，文中，白ゴマ点上接語の品詞名については通説と異なる私案（拙著『日本語文法の研究』《2007，私家版》参照）を持っているが，「です」（私案・指定詞）と「（知ら）ず」（私案・動詞否定形）をともに「助動詞終止形」とするなど，通説に従った。

[備考]

本稿は「二葉亭四迷の白ゴマ点」(『解釈』48巻7・8号, 2002, 『日本語学論説資料 第39号』《論説資料保存会, 2004》に全文収録), 「山田美妙の白ゴマ点」(『解釈』52巻5・6号, 2006), 「北村透谷の白ゴマ点」(『教職課程研究』17集, 2007) の続稿に当たるものである。